

憲法發布大典賑

清水義郎編輯

全

特39

792

031517-000-1

特39-792

憲法發布大典賑

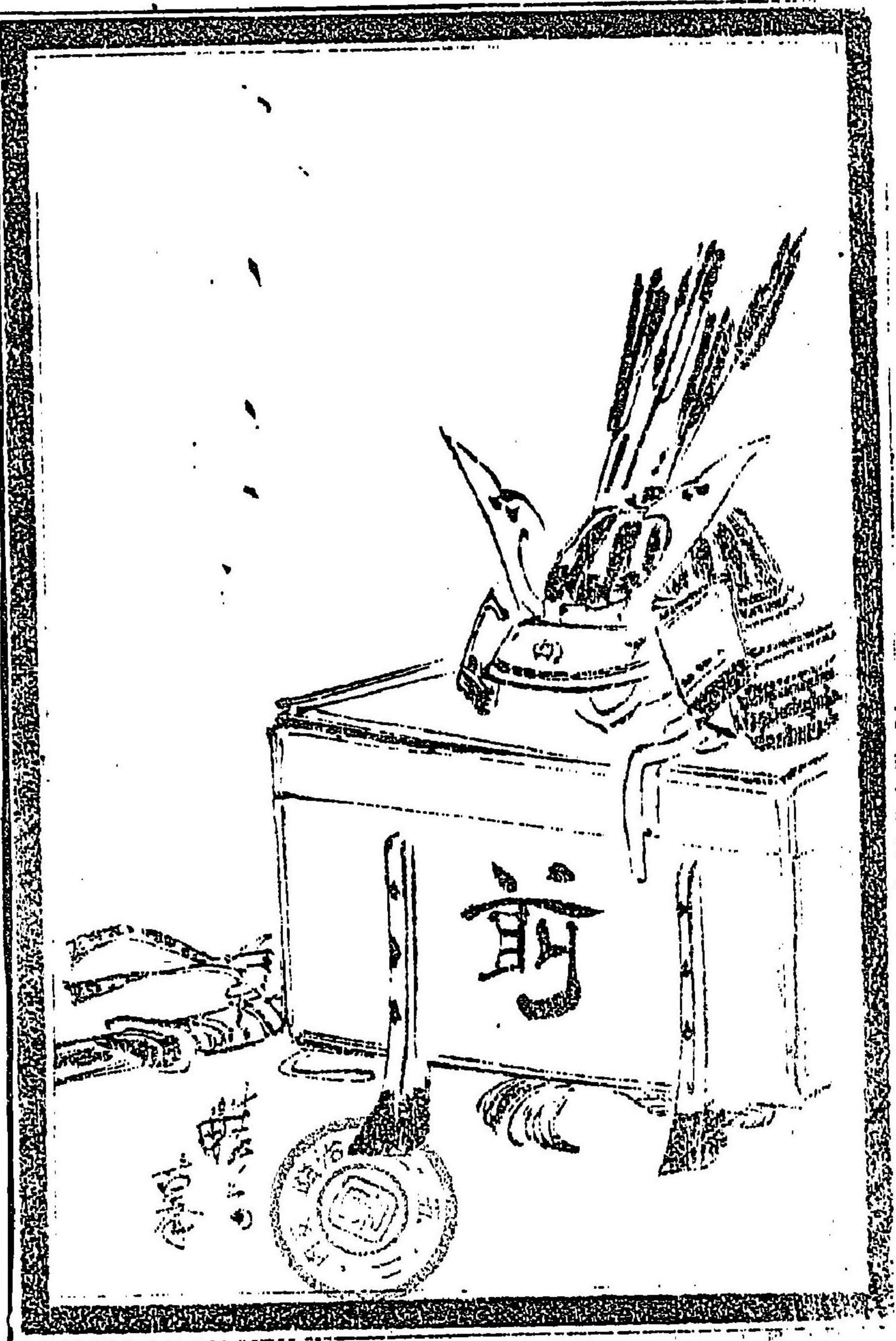
清水 義郎/編

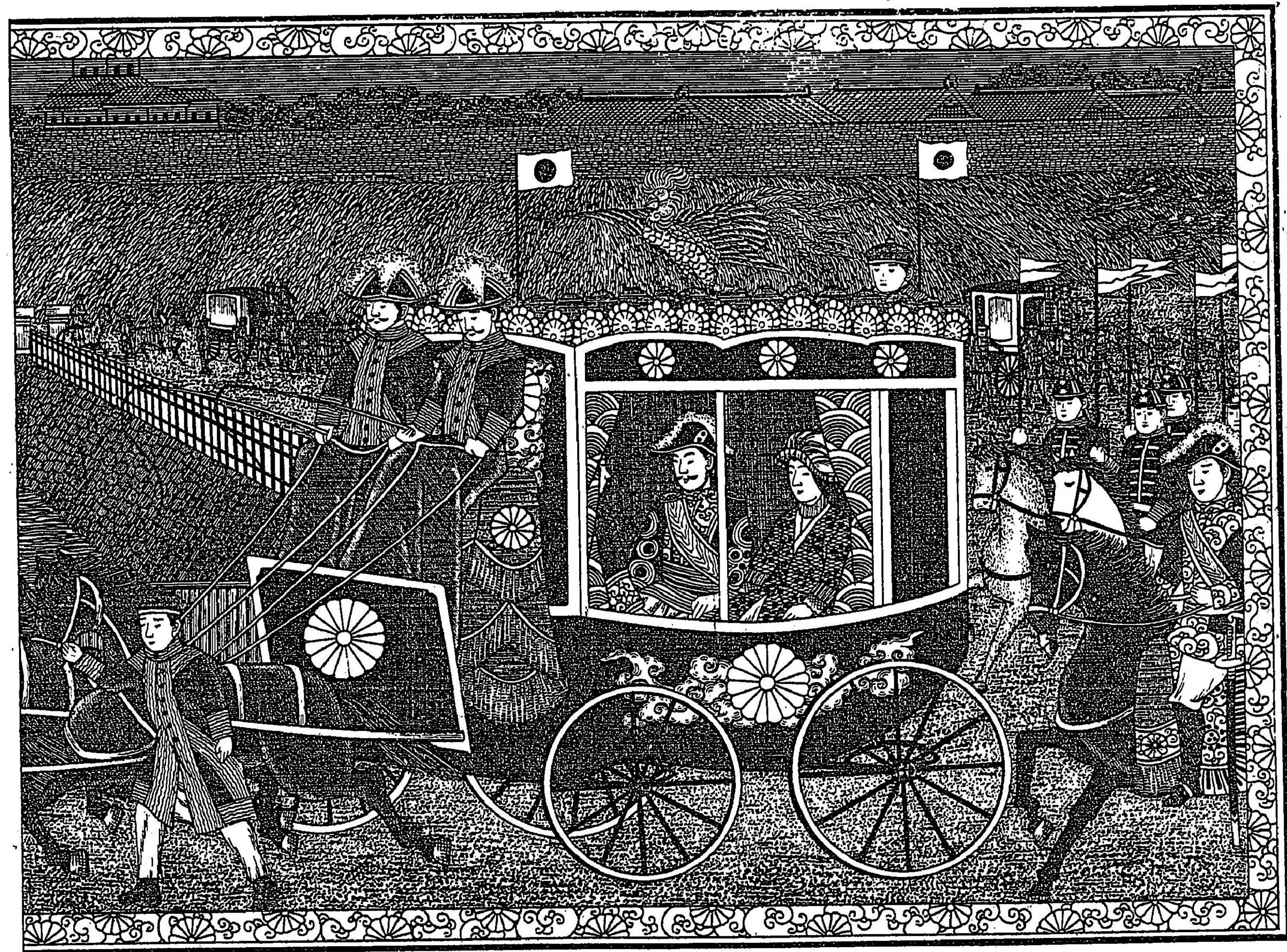
M22

BBE-0117



特 39
792 W 16583/27





千難一詔 木二
載遇朝德 草蕭乎



憲法發布場圖
法發式出



憲法

時、明治廿二年二月十一日を以て憲法御發布の大典を擧げさせ玉ひ此日ハ我々人民待よ待たる千載の一遇大日本帝國の基本たる憲法の式を賢明に於て天皇陛下ハ御告文を奉じ玉ひける該御告文ハ皇朕謹み畏み皇祖祖宗の神冥に告げ白さく皇朕天壤無窮の宏業を循ひ惟神の宝祚を承継し舊圖を保持して敢て失墜することなし情願するは世司の進運にあたり文化發達を随ひ宜しく皇祖祖宗の遺訓を明徴し典憲を成立し條章を昭示して以て内ハ子孫の率由するところと為し外ハ以て臣民翼賛の道を廣め永遠に遵行せしめ益々國家の根基を鞏固よし八州民生慶福を増



進すべし茲は皇室典範及び憲法を制定す惟よこれ皆皇祖祖宗の遺訓に胎したる統治の洪範を紹述するの外ならず而して朕が躬に連んで時と俱に擧行することを得るは洵に皇祖祖宗及び朕が皇考の威勳に倚藉するは由らざるべし



此の神祐禱り併せて朕が現在及び將來の臣民に率先し此憲法の條章を履行して怒らざらしむることを誓ふ庶幾くハ神

五

五

正殿より出御在
 々々まひ左の勅
 語を下し給ひ一同
 みて之を拝聴せり
 法発布勅語朕国家
 隆昌と臣民の慶福
 もつて中心の欣榮
 朕が祖宗に承くる
 權より依り現在及
 び將來の臣民よ
 對し此の不磨の
 大典を宣布す惟
 り我が祖我が
 宗の我が臣民
 祖の我が臣民
 對し先の協力輔
 翼より倚り我が帝



して國を愛し公
 ひ以て此の光輝
 ある國史の成跡
 を胎したるなり朕
 我が臣民に即ち祖
 宗の忠良なる臣民
 の手探なるを回想

の希望を
 同くし此
 の負を
 分つる堪ふる
 ことを疑はざ
 るなり右終り
 て帝國憲法
 を御手づか
 ら内閣総理
 大臣に授け
 させたまひ右
 よて當日の盛式を
 目出度畢らせ玉ひぬ
 早で青山練兵場へ御
 臨幸あらせられたり
 その御道筋の道路

此れを右
 たまへ式
 まて神式
 形の如く
 上皇向
 下の時

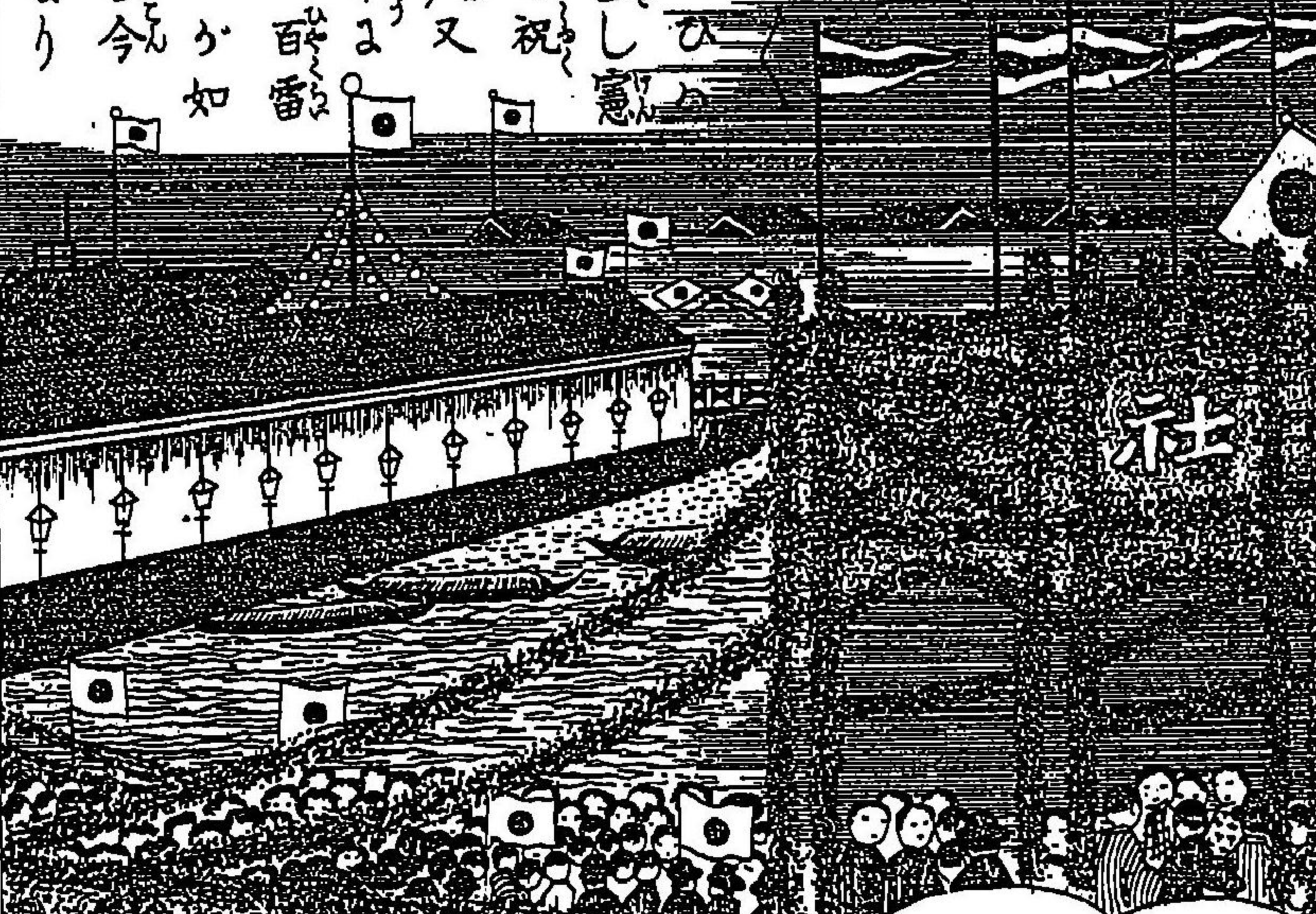


の忠實勇武
 臣民
 宗の徳
 此れが神聖なる

事と相
 願し相
 與し相
 衰は同
 我の益々
 國の光輝
 榮を中
 外に宣
 揚し祖
 宗の遺
 業を永
 久に鞏
 固なら

其二

観の老若男女群
集なしつゝあんな
で聖徳をあらふさ
聖壽万歳を祝し奉
りけり又東京府下
の區々ふてハ思ひ
の飾り付を設け或ハ
花車踊家臺を引出し
法御発布の大典を祝
さんとて木遣の聲又
ハ囃しの音葎府中
鳴りまたり恰りも百
の一時は落ちたるか
未嘗有の事どもなり



造り小田原町にてハ
神室の飾りもの又兩
國永代其外所々紅
白の布にてたんだら
包みたる門は國旗
を交斜線なし花車
或ハ踊り家臺も
各町より引き出
せり京橋區にて
ハ橋のまへ後
ろはアーチ
を作り銀坐
三丁目電燈
會社にて
も同じく
アーチを

先づ日本橋區は於
てハその橋上の前
後を杉の青葉にて
み南天の実を以て鉄道
會社の文字を造
り上は五色の旗
を立てたり四日
市の入口は造物
の大なる鯛を
飾りつけ其向ふ
接待の茶屋に通
町の飾りつけ又
三菱會社にてハ
河岸藏の家根を
汽船の形どり枕を
旗ちやうちんにて美事



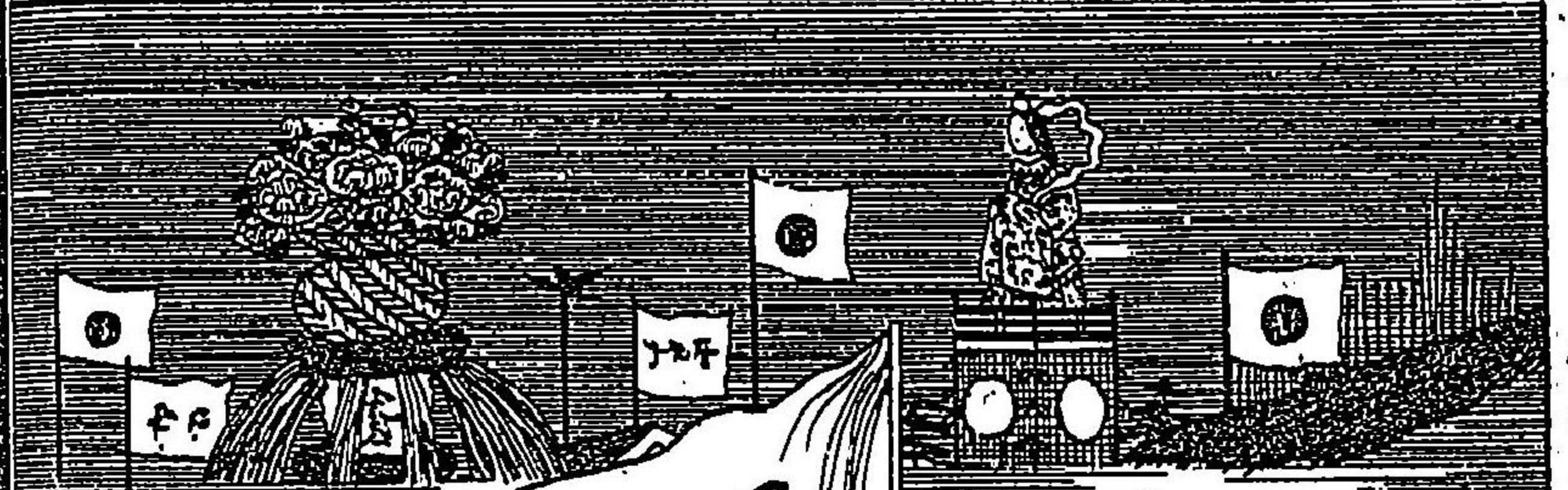
興ある事共カ
なる花車三條の
小銀治熊坂或ハ
閑羽
御幣の花車にて藝妓
鳥居を作り
大なる
葉にて
作り新橋
際ハ
杉の青
葉にて
鳥居を作り
鳥居を作り
御幣の花車にて藝妓
の車子舞ひ數十人にて引
出せり夫より牛込區よりハ
大なる牛の引ものを出し
其外神の花車又日本武の尊
盃の花車或地踊り輕業又ハ角
カ神樂など種々の趣向ありて最
興ある事共カ
なる花車三條の
小銀治熊坂或ハ
閑羽



月二たれとい何の
 ことぢやねほ
 ちやアいけね
 今日ハ早朝
 からおどろき
 行いのあす
 きよ願
 きな山
 せやくさ
 うさの
 たいな
 ナニめしが
 くら
 くら
 くら



ありかりん
 ーカつとせ
 ーカつとせ
 ーカつとせ



おくふから
 してきめり
 ほろかいな
 たれが来た
 柳派
 大橋として揃つて
 ぶつたり



「ヤレ向ふの方
 まの花車やら
 ちどり屋臺や
 らんぐてん
 てん牛がもう
 もう大がきやん
 きやん逃げま
 こるをきを
 つけておれ
 やものどもど
 下知するも最
 おかしけり

法井
 又三遊亭連中大長圓遊をまどめ圓太郎遊三その外
 大ぜいのまて方扇雀のかしらとなしかま色のつと襪
 さねのもやうをるがきてすぶめおどりは出たちありやせて
 りやせと市中を
 おどりけり
 連中よも



今日ハ早朝
 からのどろり歩
 行いのあす
 きま腹が
 さた山ど
 もやくさ
 てりをの
 たいなア
 ナニめしが
 たいな
 たいな



いふから
 すてきめつ
 ほのかいな
 たれが来た



「カレ向ふの方
 まの花車やら
 おどり屋基や
 らどんくてん
 てん牛がもう
 もう大がきん
 きやん逃げま
 こるをきを
 つけてまじれ
 やものどもと
 下知するも最
 おかしけり

自愛又三遊亭連中大長圓遊をまどめ圓太郎遊三その外
 大ぜいのまどめ方扇雀のかしらとなしかき色のつゝ襷
 をねのもやうをながめてすゞめおどりま出たちありやせて
 りやせと市中
 おどりけり又柳派
 連中よもろ

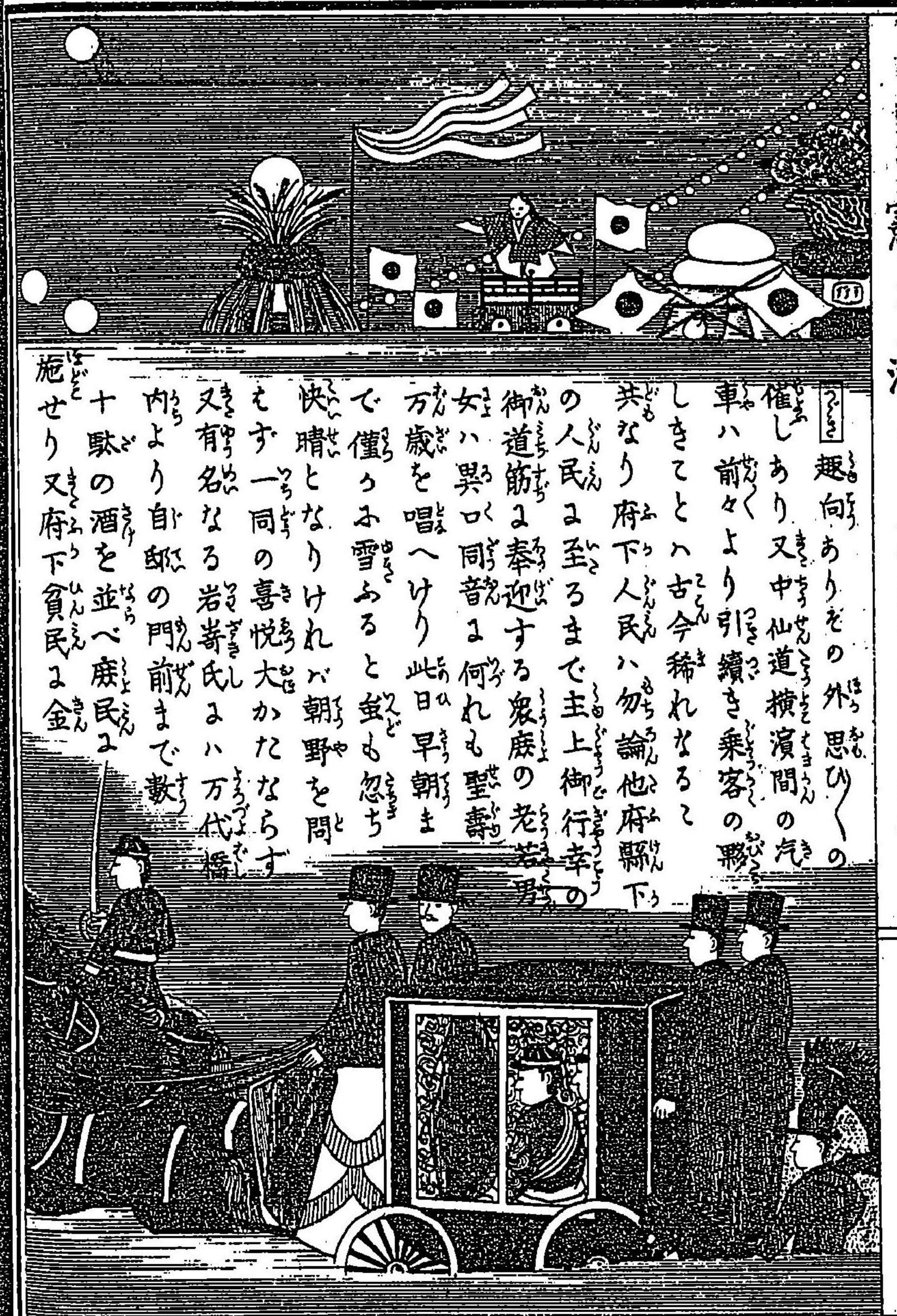
六

十一



若千円を施贈せり又市中の
 大家豪商よて軒前を飾り
 ぬきて酒を振舞へり之れ
 よりて市中の酔教を知ら
 ず或は大典を祝し或は道
 路に樹れ歌ふもあり府
 下ちとるもあり府
 及むす裏店に至る
 軒ちやうちんは
 旗を掲げたれが
 目さましきこと
 さんかたなし又
 翌十二日よ
 民の願ひを聞
 召され上野公園

十二
 上野公園



趣向ありその外思ひの
 僅しあり又中仙道横濱間の汽
 車ハ前々より引續き乗客の夥
 しきことハ古今稀れなるこ
 共なり府下人民ハ勿論他府縣下
 の人民に至るまで主上御行幸の
 御道筋に奉迎する衆庶の老若男
 女ハ異口同音に何れも聖壽
 万歳を唱へけり此日早朝ま
 で僅うふ雪ふると虫も忽ち
 快晴となりけれハ朝野を問
 はず一同の喜悦大かたならず
 又有名なる岩崎氏ハ八万代橋
 内より自邸の門前まで敷
 十駄の酒を並べ庶民に
 施せり又府下貧民に金

十二
 上野公園

祝

この日や天気が晴れ
よして市中の
路やのりかきし
故その群集
甚しく雑沓
せり此他
大坂京
都各府
縣下大
明本帝國
の全部
に到る。



憲
法

ん人玉
と有かたし
ありません
嬉しなみだ
れます

国家
万歳

所有
版權

明治二十二年
四月二十日
印刷

著作者
清水義郎
發行者
清水義郎
印刷者
鈴木徳太郎

